

毛豆多布都奴賀能迦邇余許佐良布伊豆久邇伊多流伊知遲志摩美志麻邇斗岐美本村理能迦豆  
 伎伊岐豆岐志那陀由布佐佐那美遲袁須久須久登和賀伊麻勢婆夜許波多能美知邇波阿志斯袁  
 登賣略下

〔古事記傳 三十三〕かく蟹の事を賦し絡へるは契沖も云る如く、此時御饗の御着に、此物の有つ  
 るに寄てなるべし、白檮原朝段の大御歌に鯨をよまし賜へるに同じ。註さて古に蟹を大御  
 饗に用ひしことは、万葉十六なる爲蟹述痛長歌にて知べし。三代實錄卅五に云々、攝津國蟹

〔萬葉集 十六 緣井雜歌〕乞食者詠二首 首略一

忍照八難波乃小江爾、盧作難麻理氏居、葦河爾乎、王召跡、何爲牟爾、吾乎召良米夜、明久、吾知事乎、歌  
 人跡、和乎召良米夜、笛吹跡、和乎召良米夜、琴引跡、和乎召良米夜、彼毛、此毛、二字、恐脱、命受牟等、今日今  
 日跡、飛鳥爾、雖立置勿爾、到雖不策、都久怒爾、到東、中門由、參納來氏、命受例、婆馬爾、己曾布毛、太志  
 可久物、牛爾、己曾鼻繩、波久例、足引乃、此片山乃、毛武爾、禮乎、五百枝、波伎垂、天光夜、日乃、異爾、干佐比  
 豆留夜、辛確爾、春庭立、碓子爾、春忍、光八、難波乃、小江乃、始垂乎、辛久垂來、氏陶人乃、所作瓶乎、今日往  
 明日取持來、吾目良爾、鹽漆給、時賞毛、時賞毛

右歌一首爲蟹述痛作之也

〔海道記〕八日、萱津を立て、鳴海の浦に來ぬ。中、此干瀉を行ば、小蟹ども、をのが穴々より出て、蓋き  
 あそぶ、人馬のあしに、あはて、横にをどり、平さまに走りて、我あなくへ逃入をみれば、足の下  
 にふまれて死べきは、外なる穴へ走りて命いき、外に恐なきは、足の下なる穴へ走來て、ふまれて  
 死ぬ、憐べし煩惱は、家の犬のみにあらず、愛著は濱の蟹ふかき事を、是を見ては、かなくおもふ我  
 我かしこしやいなや、略下

〔房總志料 安房郡〕一穗田、芳濱、房地名、安の漁家門戸に奇狀の蟹殻をかく、土俗云、惡鬼を辟るまじな